

東京慈恵会の成立を探る —それを支えた慈恵・維新の志士達—

中山 和彦

東京慈恵会医科大学精神医学講座

I. 緒 言

明治14年(1881)5月1日は日曜であった。その日成医会講習所が開設された。高木兼寛、33歳の時のことである。それ以後130年間の足跡を辿っていると、そこにさながら「慈恵・小宇宙」が形成されていることがわかる。それは明治という激しい変動の時代にありながらその振動に呑みこまれることなく、慈恵が「病者があり、病院があり、そこに医学校がある」という強固な思想をもって邁進したことに起因する。そして実学・実践的な医学を軸とし、それを施療という形で平等に提供するという、凄まじくも恍惚感を伴ったエネルギーを発揮することになったのである。

当時の日本のなかで慈恵・文化は異質であった。筆者は「東京慈恵会医科大学130年史(慈恵130年史)」を編集する機会を得た(130年間分ではないが、東京慈恵会医科大学の主な沿革がわかるので、年表を文末に掲載した)。その経緯を踏まえて、「慈恵130年史」の編集委員会は次の9つの時期に分類して編纂することにした。それは成医会・建学(明治14年)、東京慈恵医院設立(明治20年)、東京慈恵会の設立(明治40年)、震災からの復興(大正12年)、終戦を乗り越えて(昭和21年)、病院経営強化・分院の開設(昭和37年)、創立100年(昭和55年)、看護学科設立(平成4年)、建学の精神への回帰(平成14年～)・創立130年、である¹⁾。

「慈恵130年史」では残念ながら十分に書き著すことができず、抜け落ちてしまった写真や資料がたくさんある。特に創立から明治40年(1907)の東京慈恵会設立に至る時期は、語り尽くすこと

ができない。そこで本稿は筆者の造語ではあるが、「慈恵・維新」を通して完成した「慈恵・文化」の基盤形成にかかわった多くの人物を軸にして、「慈恵130年史」の補完版として掲載しきれなかった写真、資料をまとめて示すことにした。また先行論文の「イギリス医学の源流、東京慈恵会成立過程から探る(中山和彦:慈恵医大誌2009:124²⁾,同誌2007:122³⁾)も同様の視点でまとめたため重複する項目もあるが、今回は特に歴史的事実を継時的に一貫して整理し、貴重な資料の意義が理解しやすいように記述することを心がけた。

なかでも本稿の焦点をまず東京医学校と薩摩医学校の両方にまたがるウィリアム・ウィリスの門下生で、「慈恵・維新」の立役者及び志士達として活躍した戸塚文海、加賀美光賢(かがみみつた)、實吉安純(さねよしやすずみ)、豊住秀堅(とよすみひでかた)、河村豊洲(かわむらほうしゅう)、三田村一らにおくことにした。彼らの活動は、最終的な舞台となった東京慈恵会の設立によって、明治40年(1907)に完結した。その東京慈恵会の草案は、渋沢栄一の長女、歌子の夫である我が国最初の法学者、穂積陳重(ほづみのぶしげ)によって作成された。その骨格として総裁に有栖川宮威仁(たけひと)親王妃尉子(やすこ)殿下、会長に徳川家達(いえさと)、副会長に渋沢栄一、顧問に井上馨や阪谷芳郎(さかたによしろう)、さらに評議員には明治政府の要人である伊藤博文や大山巖などの妻達を配置した。東京慈恵会は、複雑な人脈に配慮した明治新政府の構成に酷似しており、当時としては最強の組織といえる。これは高木兼寛によっておのれの直下から突き上げて

くる「生命・使命」と「時代の振動」を共鳴させてできた熱情の結晶である。慈恵130年以後もこの根元的な生命体を振動し続けることを願う限りである。

II. 夜明け前

1. 脚気によって早まった徳川幕府の終焉

嘉永（かえい）6年（1853）ペリーが来航し、開国を迫られたその年、第12代徳川将軍、家慶（いえよし）が死亡した。その後を継いだ13代将軍、家定（いえさだ）は35歳で、14代将軍家茂（いえもち）も27歳で脚気により死亡した。さらに家茂の妻、和宮〔有栖川宮熾仁（たるひと）親王の許婚〕も32歳で脚気で死亡したのである。

このように徳川家は相次いで若くして当主を失い、次々と当主を変えざるを得なかった。その事

は徳川幕府の勢力を大いに衰えさせた。明治元年（1868）大政奉還が行われて王政復活し、江戸開城となり明治維新を迎えることになった。言い換えると脚気が開国を加速させ、明治維新を引き寄せたともいえるのである。

写真1に徳川第13代将軍、徳川家定から16代徳川宗家、家達を掲載した。

2. ウィリアム・ウィリスの登場^{4)・7)}

そんななか、ウィリアム・ウィリス（William Willis：以下ウィリスと略す）が登場する。ウィリスは文久2年（1862）、江戸駐在、英国公使館の補助官・兼・医官として来日した。写真2である程度わかるが、2メートル近い巨漢であった。

ウィリスは、1837年、アイルランドのフエルマナー州、エニスキレン郊外で出生した。1859年、エジンバラ大学卒業、ミドルセックス病院医員と



第13代将軍 徳川 家定



第14代将軍 徳川 家茂



和宮親王



第15代将軍 徳川 慶喜



第16代宗家 徳川 家達

写真1. 第13代から16代徳川宗家

第13代将軍徳川家定肖像画 徳川記念財団所蔵

第14代将軍徳川家茂肖像画、第15代将軍徳川慶喜肖像写真 福井市立郷土歴史博物館所蔵

和宮親王 幕末・明治・大正 回顧八十年史. 東京：東洋文化協會；1933. より転載

第16代宗家徳川家達 国立国会図書館 近代日本の肖像 より転載

http://www.ndl.go.jp/portrait/datas/296_2.html [accessed 2012-06-01]

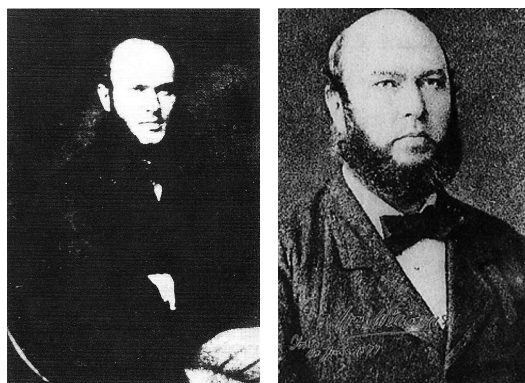


写真2. ウィリアム・ウィリス (1837-1894)

左 鹿児島大学医学雑誌 1995; 47 (補冊1) より転載
 右 鹿児島県歴史資料センター黎明館所蔵

なった。その後江戸駐在英国公使館の補助官兼医官となり、文久2年(1862)5月12日、長崎を経由して横浜に到着した。その時の日本の印象は、まず衛生状態の悪さに驚愕したという。当時の日本人の平均寿命は30歳代であり、その死因の上位に脚気があったのである。

有名なエピソードとして、同年6月26日、東禅寺事件、また8月12日、生麦事件に遭遇し、負傷者の介護にあたったことが記録として残っている。さらに文久3年(1863)、薩英戦争勃発、ウィリスも「アーガス」号に乗船して参加している。

当時の日本は尊王攘夷の嵐が吹き荒れ、ウィリスは幕末、維新という時代に翻弄されていた。そのなかでの彼の足跡を辿ると、戊辰戦争を巡る活躍が浮き出てくる。倒幕軍の薩摩藩にも多くの

負傷者が出ていた。負傷した二番大砲隊差引隊長大山弥介(巖)が従兄の西郷隆盛、大久保利通に訴え、イギリス公使パークスに協力を求めた。その結果通訳官サトウとともにウィリスは明治元年(1868)1月3日、薩摩軍陣病院のあった京都相国寺・養源院に赴くことになった(写真3)。写真4はそのそばにある薩摩藩戦死者の墓石である。ここを舞台にして、彼はヒューマニズムに根差した献身的で進歩的な医療を行った。助手として、石神良策、河村豊州、上村泉三、山下弘平がおり、その全員が後の鹿児島医学校の構成メンバーとして活躍することになる。高木兼寛は薩摩藩小銃九番隊付き医師として京都にいたが、実際には残念ながらここではウィリスとは出会っていない。

その後、圧勝した新政府軍は東へと進軍していくことになった。新政府軍は4月13日、横浜臨時軍陣病院(養生所)を開設し、ウィリスの協力を求めた。さらには8月15日、越後(高田)、柏崎、新発田、会津と戦況に応じて北上し、さながら移動野戦病院で敵味方の区別ない医療活動に従事したのである。その任務を終え11月16日に東京へ戻った。その間に横浜の軍陣病院は、東京、御徒町に移動し、東京大病院と名付けられていた。新政府は取締に石神良策を指名した。また、医学の充実を計るため神田和泉町に移して、東京大病院を医学校兼病院と改称した。そしてウィリスの数々の功績により明治2年1月20日(1869年3月2日)、彼を院長として就任させ、医学教育と医療の改革を一任することになったのである⁸⁾。



写真3. 京都相国寺・養源院



写真4. 戊辰戦争による薩摩藩戦死者の慰霊

ウィリスは我が国初の公立医学校である東京医学校において、イギリス医学に基づいた医学教育を始めた。その時の門下生の中に慈恵と深く関わりを持つことになる、後の慈恵・維新の志士たちの候補者達がいる。その主役級の人物を紹介する。

まず戸塚文海（初代海軍軍医総監、成医会、有志共立東京病院院長）、實吉安純（薩摩藩士、成医会講習所）、岩佐純（福井藩士、医事取調御用掛）、石黒忠恵（いしぐろただのり：陸軍軍医総監、東京慈恵医院）、佐々木東洋（東京慈恵医院）、池田謙斉（東京慈恵医院）である。写真5は当時の講義録「日講紀聞」である。日本名として「偉利士氏」や「宇理字弘」を使用していた。

Ⅲ. 実践的イギリス医学の開花

1. 鹿児島医学校兼病院の創立

ウィリスが東京医学校で医学教育を始めた同じ明治2年（1869）1月22日、明治政府は佐賀藩の相良知安と福井藩の岩佐純を医学取調御用掛に任命した。もともと日本の西洋医学は、長崎においてオランダ海軍軍医ポンペの後、ボードインによって大きく開花していた。相良、岩佐の二人はボードインの教えを受けていた。特に相良はオランダ医学がドイツ医学に立脚することから、当時ドイツ医学が世界の医学を牽引していると考えた。そのためなかば強引にドイツ医学導入計画を推進した。その結果急遽イギリス医学からドイツ医学へ変更されたのである。そのためウィリスは東京でイギリス流地域医療の制度を導入できず、

10ヵ月で解雇となった。政府は功績のあるウィリスの対処に困り、西郷隆盛、大久保利通、大山巖、石神良策による配慮によって、鹿児島に同年12月12日に赴任することになったのである。

鹿児島では元治元年（1864）6月、藩立開成所（磯の龍洞院前）が開設されていた。そこではジョン万次郎が英語教師として活躍していた。明治元年（1868）10月8日、そのなかに洋医学と漢方医学部門のある医学院を開設した。明治2年（1869）2月漢方医院（6月廃止）と西洋医院に分離し、その西洋医院が同年12月に南洲神社、浄光明寺跡（写真6）へ移転した。そこがウィリス、最初の赴任先であった。明治3年（1870）1月西洋医院を鹿児島医学校兼病院とした。その病院は滑川沿いの加藤平八郎宅にあった慶応2年（1866）に英国人が建設した煉瓦造りの倉庫であった。通称「赤倉病院」（写真7）と呼ばれていた。そこにウィリスが赴任し、再びイギリス医学に基づいた患者中心の臨床と日本で最初のベットサイド教育をここ鹿児島で再開することができたのである。なお医学校自体も小川町の都城屋敷跡に移転した。

ウィリスによるイギリス医学を学んだ門下生として、東京医学校に続いてここでは5年間で600名以上が育った。そのなかに後の慈恵創立、改革に大きく力を注いだ人たちがいる。

石神良策、上村泉三、河村豊洲、山下弘平は戊辰戦争の時、養源院で助手として活動した薩摩藩医である。三田村一（忠国）は東京医学校の門下生でウィリスとともにはるばる鹿児島へ赴任した。また加賀美光賢であるが、成医会講習所設立

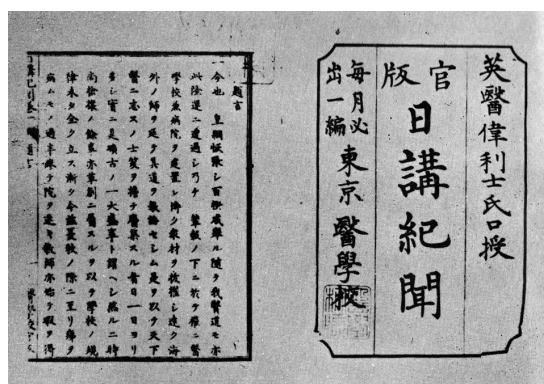


写真5. 日講紀聞 九州大学医学図書館所蔵



写真6. 南洲神社内、浄光明寺

以来活躍し、慈恵維新の志士となる最も重要な人物の一人である。そして高木兼寛もここでウィリスと出会うわけであるが、明治政府がイギリス医学を排除し、ドイツ医学を選択しなければ、この出会いはなく、慈恵も誕生していないかもしれない。歴史は新たな歴史を生み出しているといえる。

写真8はウィリスの自筆の診療録、写真9は唯一日本で書かれた論文「梅毒新論」である。当時の日本は梅毒が蔓延しており、梅毒の撲滅に力を注いだが、実際には何の手も打たれなかったという。またこれは1905年病原菌スピロヘーターの発見される33年前の著書である。ウィリスが文久2年（1862）最初に横浜に上陸した時、日本の衛生状態の悪さに驚いたと言い残していることを思い出す。症状を1期3期に分類し、予防、全身療法などについて述べ、特に当時日本で行われていた水銀療法の悪弊を指摘している。高木の脚気研究の展開に類似した内容にも思える。

2. ウィリアム・ウィリスとその家族の足跡

ウィリスの鹿児島以後の足跡については本校ではあまり紹介されたことがない。そこで今回は詳

細に佐藤八郎氏⁵⁾、森重孝氏⁶⁾や尾辻義人氏⁷⁾らの文献を引用して記録として残しておくことにする。

京都、養源院での活動は実はわずか10日間であった。しかしその後の江戸、越後、東北の軍陣病院での活躍を含め、上肢、下肢切断手術を38回施行し、消毒法（ヨード、過マンガン酸カリ）、そしてクロロホルムによる麻酔など当時の日本の医師達にとって眼を見張るショックな出来事であった。また東京医学校の活動は半年で終わったが、明治3年（1870）鹿児島医学校兼病院長として勤務してから実質5年の間に600名以上の門下生が生まれた。

明治4年（1871）、ウィリス32歳の時、鹿児島藩士、江夏十郎の娘、八重19歳と結婚した。明治6年（1873）にはアルバートを授かった。詳細は不明だが、明治9年（1876）に横浜より当時11歳のジョージ（先妻の子）を呼び寄せて生活していた。その前の年の明治8年（1875）3月一時英国に帰国し明治9年（1876）4月、再来日した。明治10年（1877）、西南戦争勃発し、2月妻子同

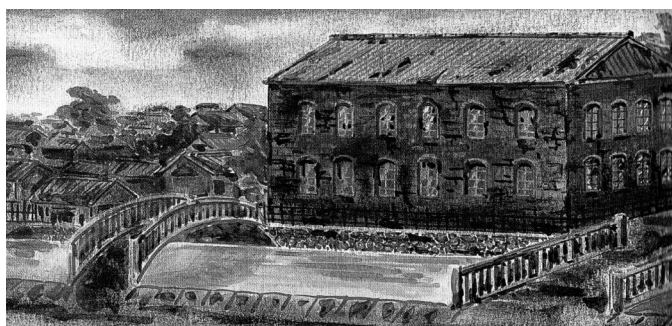
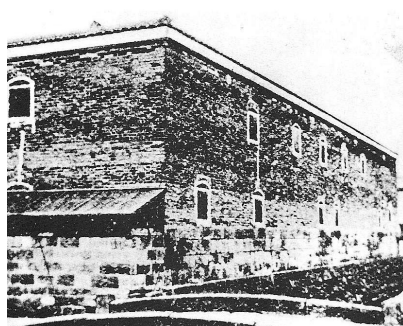


写真7. 赤倉病院（鹿児島医学校兼病院）

左 尾辻義人. 薩摩の医学史. 鹿児島日英協会会報 2005; 8: 14-7. より転載

右 鹿児島大学医学雑誌 1995; 47（補冊1）より転載

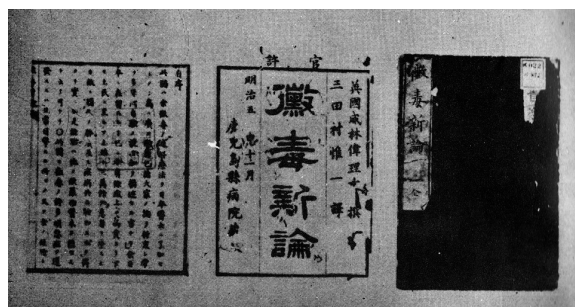
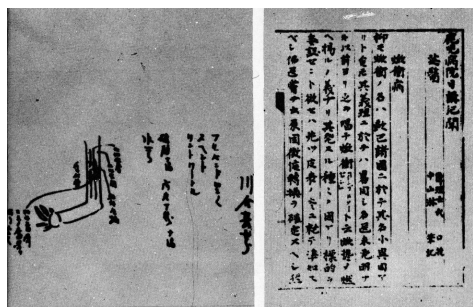


写真8. ウィリス自筆の診療録と講義録（日講紀聞）

写真9. ウィリス著「梅毒新論」 鹿児島県立図書館所蔵

伴で長崎に向かった。3月には単身で横浜に向かい、家族で住める家を東京に探し5月に家族を呼び寄せた。しかし8月になって再会を約束して単身で帰英した（10月23日到着）。その後明治14年（1881）11月再来日した。この時期は実は高木兼寛が成医会、成医会講習所を設立した年であった。高木はなぜか恩師ウィリスを採用しなかった。その理由は何だったのか。おそらくウィリスの医学は既に最先端ではなかったのである。高木は5年間のイギリス留学でウィリスの医学を超えていたのだ。残酷にもウィリスは日本で再就職先が見つからず、失意のまま明治15年（1882）、今度は息子アルバートを同伴して帰英した。その後ロンドンでは兄のジョージと一時開業したが、アーネスト・サトウからの誘いで、明治18年（1885）シャム国バンコック駐在の英国公使館医官となった。そこでは欧米人向け公衆病院及び私立病院を設立した。明治25年（1892）病気のため帰英し、明治27年（1894）57歳、閉塞性黄疸で死去した。ウィリスの亡くなる6ヵ月前の明治

26年（1893）8月、写真10のウィリアム・ウィリス頌徳記念碑が鹿児島市の城山中腹に建てられた。これは門下生である上村和三、烏丸一郎、永田利紀、東清輝、森山昌則、山元文宅らが発起人になり、135名の寄付を集めて造られた。写真11にあるようにその裏面の最初に高木兼寛の名前が見える。写真は不鮮明であるが上段のある人物のほとんどは成医会講習所の主要メンバーである。その碑の斜め向かいには、明治24年（1891）、後に高木兼寛が運命的に関わる大津事件の主役であるニコライ二世の来鹿記念碑が現在でも建っている（写真12）。昭和30年（1955）の春、鹿児島医科大学病院が県庁西側の元私学校跡地に開設されたが、その落成前の昭和29年（1954）10月ごろその庭に移転した。さらに昭和49年（1974）現在の鹿児島大学の同窓会・鶴綾会館の中庭に移築されている（同窓会館の講堂の名称はウィリアム・ウィリスホールとなっている）。

ウィリスの家族の足跡は注目すべきものがある。ウィリスの子、アルバートは、バックスター家の



写真10. ウィリスの頌徳記念碑（明治26年）
前列右から5人目が高木兼寛



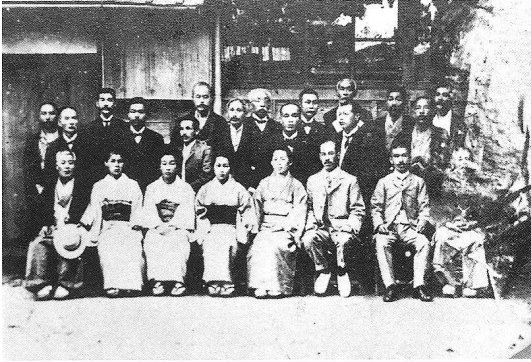
写真11. 頌徳記念碑の裏面



写真12. ニコライ二世来鹿記念碑

養子となり、英国からオーストラリアに渡った。明治39年（1906）3月アルバート33歳、暎の母を訪ねて来日した。横浜で劇的な母子の再会を果たした。翌年母子で鹿児島を訪ねた時の写真が残っている（写真13）。その後日本に定住し、昭

和16年（1941）9月日本名「宇利有平」で帰化が認められた。昭和18年（1943）12月17日に亡くなるまで、関西大学、奈良県の中学、岡山県など35年間、英語教師として勤めている。その間、平田キクと結婚し、三男二女の子宝に恵まれた。現在二女河内まり代（マリー、写真14）氏が健在である。



江夏八重・アルバート歓迎会
明治四十年八月十四日
鹿児島市田ノ浦、風景楼にて

熊谷 正助	肥後宗一郎	田崎正太郎	永田 利紀	中山 晋平	手塚 盛徳	坂元 栄助	税所 栄助
鳥丸 一郎	上田 義高	中尾 東陽	桑原次郎	森山 昌則	東 清輝	田上 義順	山下 宗伯
黒木 元俊	東 夫人	森山 夫人	中山 夫人	江夏 八重	アルバート	市来（通訳）	上村 泉三

写真13. ウィリスの実子アルバートと母八重再会
鹿児島大学医学雑誌 1995；47（補冊1）より転載



八重夫人



ウィリス夫妻（アルバート・キク）



アルバート



河内まり代氏



宇利家墓所

写真14. 八重夫人とアルバート一家
個人蔵（河内まり代氏提供）

3. 海軍軍医寮の設立とアンダーソン

石神良策はウィリスと共に鹿児島に戻り、鹿児島医学校で片腕として尽力したが、1年余りで兵部省に召し出されて、海軍軍医寮に実権者として入った。制度面で英国的医風を確立したく、ウィリスの門弟を招致した。明治5年（1872）4月15日に高木兼寛を海軍省九等として、また明治7年（1874）には加賀美光賢を呼び寄せ海軍入りさせた。すなわち高木はウィリスのもとでの修行は明治3年（1870）から正味1年半程であった。石神は明治4年（1871）に既に東京医学校でのウィリスの門下生であった實吉安純、さらに豊住秀堅を導入していた。両名とも薩摩出身であった。高木はその後、海軍中軍医、大軍医、少医監と昇進していった。そして、明治6年（1873）、海軍軍医学校教官として来日した英医アンダーソンの推薦で明治8年（1875）から13年（1880）までセント・トマス医学校へ留学することになった。アンダーソンは明治12年（1879）に帰国し、セント・トマス病院に勤めているので、高木とアンダーソ

ンは英国で再会していることになる。

ここで海軍軍医寮の変遷についてまとめておく。

- 1) 慶応4年（1868）：戊辰戦争、御親兵病院（軍事病院）が京都に設置
- 2) 明治3年（1870）6月25日：海軍病院の開設（高輪）
- 3) 明治4年（1871）7月5日：軍医寮の設置（陸・海軍）
- 4) 明治5年（1872）10月13日：海軍軍医寮の設置
（石神良策、軍医権助：海軍軍医寮の初代の頭）
- 5) 明治6年（1873）8月9日：海軍病院学舎を設置
ウィリアム・アンダーソン招聘：明治6年（1873）から12年（1879）まで
- 6) 明治7年（1874）8月23日：海軍軍医寮学舎
- 7) 明治9年（1876）8月31日：海軍医務局、海軍軍医学舎
- 8) 明治15年（1882）：海軍医務局学舎
- 7) 明治17年（1884）：海軍軍医学舎

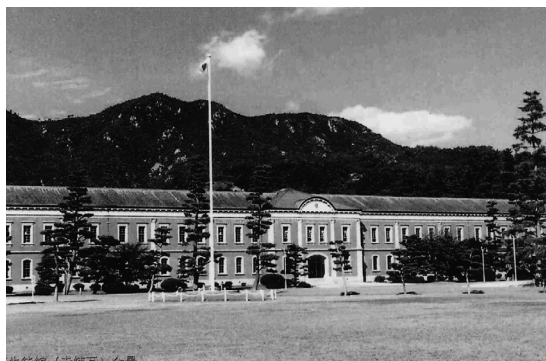
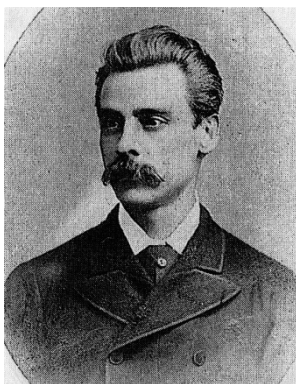


写真15. 海上自衛隊（江田島）



アンダーソンの門下生
鈴木重道、木村壮介、
山本景行、戸塚環海、
鶴田鹿吉、青木忠橘、
島原重義ら15名
（海軍医療学舎卒業）

ロンドンでの活躍

- ◆美術家としてロンドン博物館へ
- ◆日本絵画100点寄贈
- ◆ロンドン日本人会役員
- ◆外科、皮膚科医として Anderson-Fabry病を発表

英医・アンダーソン

明治6年、海軍軍医学校教官として来日、高木兼寛を母校セント・トマス病院医学校に紹介した。

写真16. ウィリアム・アンダーソン

松田誠、高木兼寛小伝—高木兼寛のなかの少年藤四郎—、
慈恵ニュース 1991; 124: 20-26. より転載

チェセルデン銀賞



写真17. 学術並びに品行善良最優秀賞

- 8) 明治19年(1886):海軍医学校
- 9) 明治22年(1889):海軍軍医学校
- 10) 明治27年(1894)3月31日廃止

重要なことは、明治14年(1881)成医会講習所が開設されてから、明治23年(1890)1月9日成医学校として自力で教育が出来るようになるまでの8年間、海軍医学校と合流した形で教育が行われていた歴史的事実である。写真15は現在の江田島にある海上自衛隊の建物である。いかに海軍にイギリス文化が浸透しているかよくわかるレンガ造りの建物である。

このようにみていくと高木にとって海軍での教育、医療活動の経験が、成医会、成医会講習所開設の基盤になっているのがわかる。

アンダーソン(写真16)が海軍医療学舎で育てた15名の門下生のなかに、鈴木重道(しげみち)、木村壮介、山本景行(かげゆき)、島原重茂、青木忠橘、鶴田鹿吉(つるだしかきち)ら成医会、成医会講習所、そして東京慈恵医院の創立メンバーがいる。

またアンダーソンは美術家としても有名で、日本滞在中に収集した日本絵画100点を大英博物館に寄贈している。またロンドン日本人会役員として当時の日本人留学生の面倒を積極的にみてくれた。さらには帰国後、遺伝性疾患であるAnderson-Fabry病を世界で最初に発表した。これは筆者が偶然に見つけたことである。130年以上の時を超えて、慈恵医大の衛藤義勝教授、大橋十也教授を中心に、本疾患の基礎研究、臨床研究の世界的なセンターになっている。このことは何かの因縁と歴史のロマンを感じる事実である。

写真17は高木の功績である、チェセルデン銀賞(銀賞が1等賞)、学術並びに品行・善良・最優秀賞のメダルである。特にチェセルデン銀賞のデザインをじっくり観察すると、イギリスの長い歴史に強く根づいた強い自信が伝わってくる。当時の文化的にも国際的にも隔絶された日本では描ききれないデザインである。

IV. 創世記－高木山脈・地盤隆起

明治8年(1875)4月11日、東京医学会社が、松山棟庵、石黒忠恵、早矢仕有的(はやしうてき)、安藤正胤(ただたね)、三宅秀、田代基徳らによって創立された。その組織を基盤に、明治13年(1880)1月7日、成医会が高木兼寛、松山棟庵、隈川宗悦、田代基特、新宮涼園、松山誠二、豊住秀堅、鈴木重道、木村壮介、山本景行らによって創立された。このメンバーをみると全て元慶応義塾医学所の教師、海軍医療学舎卒業生、または海軍軍医部卒業生で構成されていることがわかる。

高木山脈は様々な活動を行いながら、確実に地盤隆起していった。そして慈恵維新に辿りつくわけであるが、そのなかで志士といえる人物は誰か、これが本稿のメインテーマである。それを探索するために大学と病院の歴史を要点に絞って検証し⁹⁾¹⁰⁾、該当人物を抽出することにした。

1. 大学の歴史

1) 成医会講習所

高木は慈恵医大の創立記念日である5月1日に成医会講習所を東京医学会社(京橋区館屋町11番地)内に開設した。

その主たるメンバーは、松山棟庵のほか、實吉安純:鹿児島出身、東京医学校の門下生
加賀美光賢:山梨出身、鹿児島医学校
河村豊洲:薩摩藩医、養源院、鹿児島医学校
豊住秀堅:薩摩出身、海軍軍医部、義弟
のほか木村壮介、鈴木重道、山本景行(義弟、海軍医療学舎)、鶴田鹿吉、石黒宇宙治、吉田貞準、戸塚環海、本田忠夫らである。この12人は、全て海軍・軍医総監経験者で、前述のように明治23年(1890)まで8年間は海軍・医務局・学舎と共通の教員で運営していた。また場所も芝山内の海軍医務局学舎、一時天光院で病院と同居したが、明治23年(1890)に東京慈恵医院構内に移動するまで、旧海軍衛生部跡、芝山内電信修技学校跡など転々としていた。

成医会講習所卒業一期生に、野村虎長(とらなが)、桑原敬忠(くわばらよしただ)がいる。

写真18, 19は、明治18年(1885)9月、桑原敬忠の卒業証書以外は、全て野村虎長の孫からの

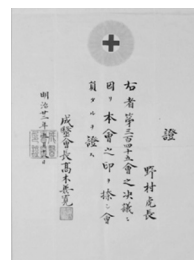
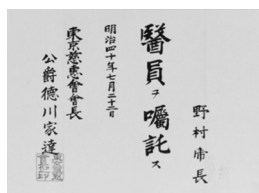
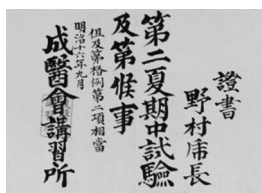


写真18. 成医会講習所第1期生卒業と野村虎長

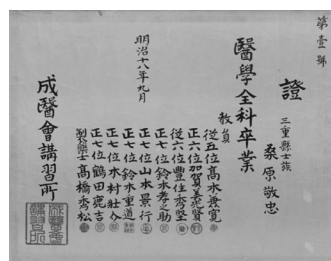
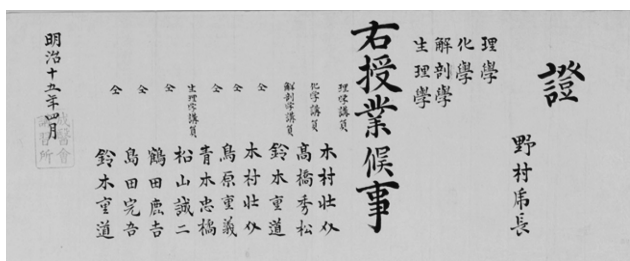


写真19. 桑原敬忠と野村虎長



写真20. 野村虎長、新橋写真館で撮ったスナップ

野村 虎長

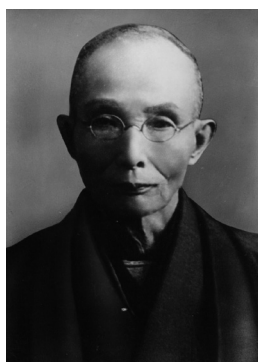


写真21. 後年の野村虎長とロンドン留学時のパスポート

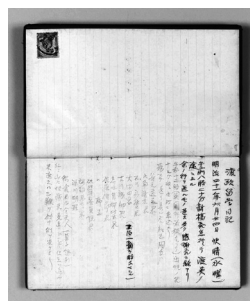


写真22. 虎長のロンドン留学日記

寄贈である。まず一期生5人が高木兼寛を囲んだ写真であるが、左端が虎長である。明治15年(1882)4月理学、科学、解剖学、生理学の終了を示すもの、明治16年(1883)第二夏期中試験の合格証、明治22年(1889)9月18日とあり、成医会会員として承認するものである。興味深いのは卒業証書や学業修了証にある教師の名前である。すでに紹介してあるのでその名前の意義がよく理解できると思う。

写真18は野村虎長が明治40年(1907)7月22日づけで東京慈恵会の会長である公爵徳川家達より醫員を嘱託されたものである。この時こそが筆者の主張する「慈恵・維新」である。野村虎長は奄美大島の出身であるが、高木兼寛の書生であった。そのほかの卒業生も鹿児島を中心として九州出身者が多かったようである。虎長は長く慈恵に留まり高木の実践的な片腕として活躍した人物である。その意味では「慈恵・維新」後の同志といえるかもしれない。写真20は当時の虎長のスナップ写真である。新橋の写真館で撮影されたものでありモダンな服装や当時貴重な自転車も自慢げである。さらに写真21,22は虎長が明治41年(1908)6月にロンドンに留学したときの日記である。高木は当初の卒業生全員をロンドンに留学させていたという。その受け入れ窓口としてアンダーソンが全面的に世話をしてくれたといわれている。

2) 成医学校

明治23年(1890)1月9日成医会講習所から1年間の短命であったが成医学校となった。しかし歴史的には大きな意味があった。それは8年間の海軍軍医学校の共棲(きょうせい)から脱皮し、東京・慈恵医院内へ移転し東京慈恵医院会と一体化したのである。後述するが病院の歴史で重要な、明治20年(1887)4月1日、病院の資金運用団体であった婦人慈善会が東京慈恵医院会と変称し、病院と一体化した。そのおかげで海軍軍医学校から独立することができたのである。

3) 東京慈恵医院医学校

明治24年(1891)9月7日に東京慈恵医院医学校、すなわち病院の附属医学校として、生まれ変わった。これは高木がお手本にしてきたセント・

トマス病院・医学校と同じ形態の医学校になったわけである。海軍軍医学校から完全独立をめざし、その証として成医学校からのメンバーは、木村壮介、山本景行、瀬脇壽雄(せわきひさお)など、15名中6名だけになった。この体制は12年間継続した。

4) 東京慈恵医院医学専門学校

明治36年(1903)6月4日、成医会講習所、成医学校、東京慈恵医院医学校を経て、ついに東京慈恵医院医学専門学校が誕生した。創立以来のメンバーは實吉安純、鶴田鹿吉、桑原莊吉(くわはらそうきち)、瀬脇壽雄だけとなった。

5) 東京慈恵会医院医学専門学校

病院が社団法人東京慈恵会東京慈恵会医院となったため、明治41年(1908)5月14日、東京慈恵会医院医学専門学校と改称した。

6) 財団法人東京慈恵会医科大学

大正10年(1921)10月20日、ついに財団法人東京慈恵会医科大学となった。そのとき創立以来の唯一のメンバーは、顧問としての實吉安純のみであった。

2. 病院の歴史(東京慈恵会医院以前まで)

1) 有志共立東京病院

歴史を巻き戻して、今度は病院としての歴史の概略をまとめておく。

成医会講習所の臨床教育現場として病院が必要であった。そのため明治14年(1881)2月施療病院創立有志会(創立委員:36名)が設けられた。その主なメンバーは高木兼寛、松山棟庵、隅川宗悦(すみかわそうえつ)、戸塚文海、豊住秀堅、田代基徳、新宮涼園、安藤秀賢(成医会会員)、子安峻(読売新聞社長)、成島柳北(朝日新聞)、早矢仕有昉(丸善)、小松崎茂助、加藤九郎、安田定則、前田利充らである。同年7月7日病院設立にあたり、成医会講習所生ならびに海軍医務局学舎生徒の実習をさせることを織り込み、さらに8月には旧東京府病院(院長:長谷川泰)の地所、家屋、その他の附属品、医療機械など5年間借りられることになった。ところが同年コレラが大



写真23. 有志共立東京病院のあった天光院

流行したため、やむなく写真23の天光院（芝公園）にて明治15年（1882）8月11日、施療病院としての有志共立東京病院が診療を開始した。院長は戸塚文海、高木兼寛はあくまで副院長であった。医員として松山棟庵、隅川宗悦、河村豊洲、加賀美光賢が活躍した。

なお明治16年（1883）9月25日、天光院から現在地へ移転が行われ10月10日より活動を開始した。そして大きく遅れたが明治17年（1884）4月19日、有栖川宮威仁親王殿下が総長として就任され正式な開院式が挙行された。その時の告辞を高木兼寛は英語で行ったという。また東京府病院の廃止のため、公的な施療病院がなくなった。そのあとを引き継いで、私立の病院が貧窮者に対して救済事業を行うことは大きく評価されたのである。

2) 婦人慈善会の設立

施療病院である有志共立東京病院は、有栖川宮威仁親王殿下が総裁であったものの、有志と名付けられているように、経営母体はあくまで有志による寄付が主であった。当然それだけではすぐに経営は困難になった。そこで高木は伊藤博文の進言により、明治新政府の重鎮の夫人達、伊藤梅子、井上武子、大山捨松らによって、明治17年（1884）5月、後援組織として「婦人慈善会」を結成することになった。その構成メンバーは以下の通りである。

婦人慈善会

（伊藤博文発案：本病院経済的援助組織）

総長：有栖川宮熾仁親王妃薫子（ただこ）殿下

副総長：有栖川宮威仁親王妃慰子殿下

会頭：大山巖夫人（捨松）

副会頭：伊藤博文夫人（梅子）、井上馨夫人（武子）

委員：西郷従道夫人（清子）、松方正義夫人（満知子）、山県有朋夫人（友子）、鍋島直太夫人（栄子）、毛利安子

このメンバーをみると当時の錚々たる明治政府要人の御夫人であることは意味深い。中でも何よりも心強かったのは総長が有栖川宮熾仁親王妃薫子殿下、副総長は有栖川宮威仁親王妃慰子殿下であり（写真24）、皇室の協力を戴くための明確な組織ができあがったことだった。

有栖川宮
熾仁親王有栖川宮
熾仁親王妃
薫子殿下有栖川宮
威仁親王有栖川宮
威仁親王妃
慰子殿下

写真24. 有栖川宮家



伊藤博文、梅子夫妻



井上馨、武子夫妻



松方正義、満佐子夫妻



大山蔵、捨松夫妻

写真25. 婦人慈善会の主たるメンバー

伊藤博文、井上馨、松方正義、大山蔵、大山捨松 国立国会図書館 近代日本の肖像 より転載

<http://www.ndl.go.jp/portrait/index.html>. [accessed 2012-06-01]

伊藤梅子、井上武子 永原和子監修. 日本女性肖像大事典. 東京：日本図書センター；1995. より転載

松方満佐子 鹿児島市立美術館所蔵

有名な鹿鳴館バザーはこの後援組織によって行われた。その寄付金によって大きな資金を得たが、実際にはその効果は一時的でもあった。写真25は婦人慈善会の主たるメンバーである。

3) 東京慈恵医院へ改名

施療制度の確立にはさらに運営強化の必要性があった。明治20年（1887）4月1日、有志共立東京病院は東京慈恵医院と改名した。同時に婦人慈善会も東京慈恵医院会と称し、病院と一体化した。そのときに成医学校が東京慈恵医院医学校となったのである。

病院の構成も大きく変わった。

総 長：昭憲皇太后（しょうけんこうたいごう）

幹事長：有栖川宮熾仁親王妃薫子殿下

幹 事：毛利安子、鍋島直太夫人（栄子）、山県

有朋夫人（友子）ほか9名

院 長：高木兼寛

次 長：實吉安純

商議医員：戸塚文海、池田謙斉、岩佐純、石黒忠恵、緒方樵準、佐藤進、長谷川泰

なかでも大きな変化は戸塚に代わって、高木が院長、次長に實吉安純が就任したことである。しかし最も大きな改革は総裁に明治天皇皇后陛下（昭憲皇太后）を推戴（すいたい）すること、さらには幹事長を有栖川宮熾仁親王妃薫子殿下とすることであった。

この改革によって皇室からの援助、民間有志からの援助は目に見えて増加した。

この頃より婦人会の拠金者のなかに、渋沢栄一の長女である穂積歌子の名前が出てくるようになった。これがその後の慈恵に待ち受けている、大きな改革に種火となるのである。



写真26. 新宮涼庭と順正書院
花洛名勝図会 新宮氏順正書院 (1864年) より転載



写真27. 石門 (国の登録有形文化財)

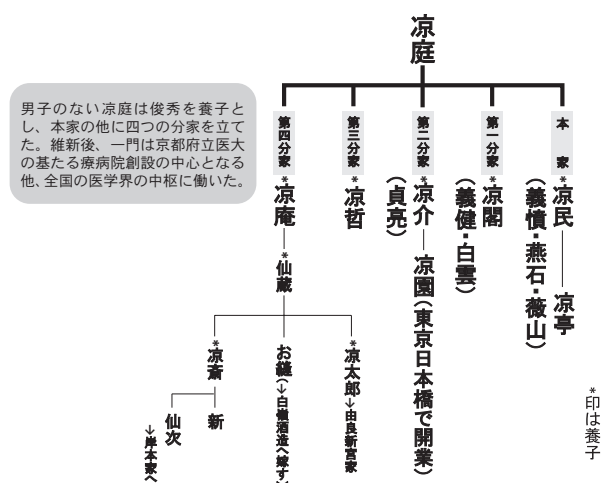


図1. 新宮一門 新宮涼庭と丹後の医の流れ：京都府立丹後郷土資料館 監修・発行、特別陳列図録37番より転載

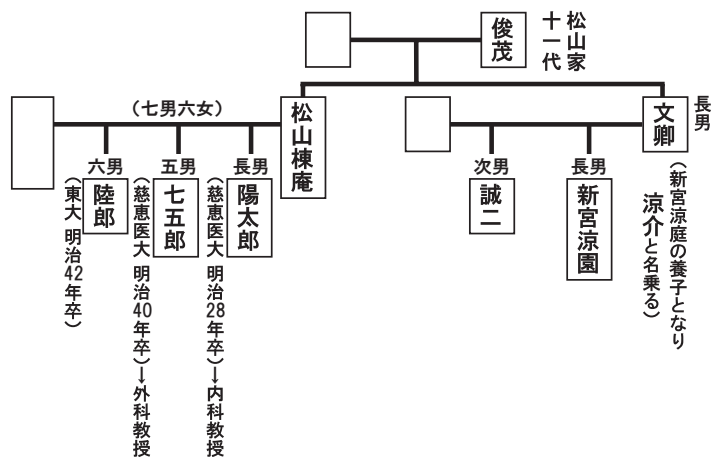


図2. 松山家 家系図

ここで成医会、成医会講習所、また有志共立東京病院の全てに顔を出す、松山棟庵と新宮涼園、松山誠二について概説する¹¹⁾¹²⁾。順正書院とは新宮涼庭によって文政2年(1819)に京都、南禅寺横に西洋医学の組織に似せた医学教育を行う文化人交流の場として設立されたものである(写真26, 27)。当時蘭学塾の勃興期であった。天保9年(1838)には緒方洪庵が大坂に適塾、江戸では佐藤泰然が和田塾を開いた。この二つを含め当時三大蘭学塾と呼ばれた。新宮塾・順正書院では多くの門下生が生まれた。

図1に新宮一門、図2に松山家の家系図を示した。松山棟庵の父、俊茂、また長兄の文卿とともに、棟庵も新宮塾で蘭学を学んだ。特に兄は優秀で涼庭の養子となり、涼介と名乗ることになった。その新宮涼介の長男が新宮涼園であり、その弟が

松山誠二なのである。すなわち松山棟庵にとって涼園、誠二は甥にあたる。棟庵が成医会、成医会講習所の設立、運営に如何に精力を尽くしていたかがよくわかる。写真28, 29は現在の順正書院、写真30は新宮家の菩提寺、南禅寺天授庵である。

また写真31は新宮涼園である。新宮涼園は慶応2年(1866)京都にて岩佐純に従い蘭学、医術を学びながら英学を研究した。さらに叔父松山棟庵に従い英語、医術を学んだ。19歳の時上京し慶応義塾経由して、岩佐純に従い大学東校に転じた。その途中で英語を廃止しドイツ語を用いることになったため退校した。明治5年(1872)横浜十全病院で米医シモンズに従い医術を学んだ。そのころいわゆる慶応医学校が設立され叔父棟庵とともに医術を教授した。明治8年(1875)一時京都に戻り、京都府立療病院に勤務するが、明治



写真28. 順正書院 (国の登録有形文化財)



写真29. 新宮涼庭塾・順正書院



新宮涼庭



新宮涼園

写真30. 南禅寺天授庵 (新宮家の菩提寺)



写真31. 新宮涼庭の養子、涼園は棟庵の甥

- ◆棟庵の父、俊茂、兄の文卿同様、松山棟庵も新宮塾で蘭学を学ぶ
- ◆兄は涼庭の養子、涼介と名乗る
- ◆涼介の長男が新宮涼園、その弟が松山誠二
- ◆松山棟庵は明治20年皇族中心の体制の完成と共に慈恵会から去っていく
- ◆しかし長男、陽太郎、五男、七五郎は本学を卒業しそれぞれ内科、外科の教授となっている

10年（1877）慈恵医大そばの芝区三田で開業した（その後日本橋に転居）。当然成医会のメンバーとして参加する運命にあったのである。

ここでもう一つ興味深いエピソードを紹介する。現在京都府立医科大学（京都府立医大）と慈恵医大は姉妹校の関係であるが、両校の学祖、また歴史的事実について偶然とはいえ注目すべきことがわかった。まず京都府立医大の学祖である明石博高はウィリアム・ウィリスが京都相国寺で消毒法、クロロホルム麻酔による四肢切断術によって多くの負傷者を助けたその時、それを目の当たりに体験しているのである。当時明石は御苑内施薬院にて医療活動に従事していた。その影響を大きく受けて、明治元年（1868）、栗田口青蓮院で京都府療病院を開設した。その前身である医学研究会を明石博高と新宮涼閣が設立したのである。この人物は新宮一門の図でわかるように、第一分家の当主である。また前述のように新宮涼閣も明治8年（1875）京都府立療病院に参加している。これが現在の京都府立医大のルーツである。特に神部文哉は精神病約説やレイノルズによる内科全

書（モーズレー分担執筆）によってイギリス医学を導入した。しかし既にドイツ医学を明治政府は選んでおり、府立という立場もあり、ヨンケルやマンズフェルト、ショイペイらが着任して急速にドイツ医学が定着した。結局慈恵医大とは違う道を歩むことになったのである。それが時を超えて兄弟校として契りを結ぶことになる。両校創立において共通の歴史的体験の意義は、偶然ではあるが運命的に導かれているような強い絆を感じる。

V. 慈恵・維新としての大改革

あれほどイギリス医学に対して高木とともに情熱を示し、すさまじい行動力のあった松山棟庵は、明治20年（1887）皇族中心の病院体制の完成と共に、高木のもとから去って行くのである（しかし長男、陽太郎は明治28年（1895）、五男、七五郎は明治40年（1907）に本学を卒業しそれぞれ内科、外科の教授となっている）。その理由はともかく、高木兼寛の活動のエンジンが松山棟庵から別の人物に変わっていったことを意味する。そ

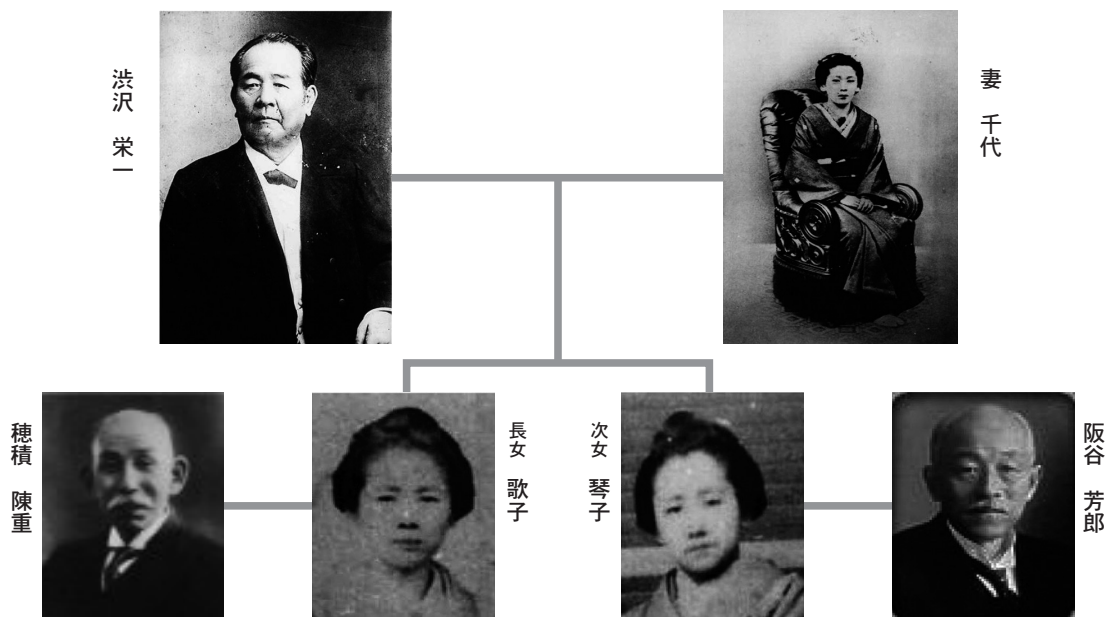


図3. 洪沢家 家系図

洪沢栄一、歌子、琴子の写真 洪沢史料館所蔵

穂積陳重 日本学士院（第10代学士院院長）より転載

<http://www.japan-acad.go.jp/japanese/about/successive.html>. [accessed 2012-06-01]

阪谷芳郎 阪谷芳郎傳、故阪谷子爵記念事業舎編、東京：東京都千代田区日比谷公園市公会館東京市政調査会；1951. より転載

の主役が渋沢栄一であった。まずその渋沢家の家系図を写真と共に示す(図3)。

明治29年(1896)4月、幹事長が有栖川宮威仁親王妃恵子殿下に交代した。同時に常任幹事に穂積歌子と阪谷琴子(さかたにことこ: 渋沢栄一の次女)が加入、渋沢かね子(渋沢栄一の妻)をはじめ、渋沢家の慈恵医院に対する援助は深まっていた。しかし、それに反して明治29年(1896)から39年(1906)までは収入は横ばいで、医院経営、活動に再び大きな限界がおとずれたのである。そのためには大改革は必須であった。それはもはや維新と表現した方が適切なぐらいの緊迫した状況であった。

1. 社団法人東京慈恵会の設立

その維新的な改革とは、明治40年(1907)7月19日、社団法人東京慈恵会の設立のことである。その時、名称も東京慈恵会医院と改名した。まずその大改革とは以下のようなものである。

総 裁: 有栖川宮威仁親王妃恵子殿下
 会 長: 公爵 徳川家達
 副 会 長: 男爵 渋沢栄一
 顧 問: 侯爵 井上馨, 男爵 阪谷芳郎, 穂積陳重, 岩崎弥之助, 松方正義ら
 理 事: 蜂須賀茂昭, 徳川家達, 鍋島直大, 渋沢栄一, 實吉安純ら
 評 議 員: 伊藤梅子, 大山捨松, 松方満佐子, 井上武子, 阪谷琴子, 穂積歌子, 渋沢かね子ら
 院 長: 高木兼寛
 副 院 長: 實吉安純
 商業医員: 男爵 石黒忠恵, 男爵 岩佐純, 松山棟庵
 医 員: 金杉英五郎, 高木嘉寛, 樋口繁次, 野村虎長ら

これが穂積陳重による東京慈恵会の組織である。最後に成医会講習所の第1期卒業生である野村虎長の名前があることにも注目したい。

2. 慈恵・維新による最強の組織の誕生

慈恵・維新のコーディネーターである穂積陳重、その夫人が渋沢栄一の長女、歌子であった。穂積歌子は渋沢栄一の次女の阪谷琴子とともに東京慈

恵医院会の常任幹事で、渋沢一家総出で高額の寄付をしていた。恵子妃殿下は穂積、阪谷夫人に相談して、父親である渋沢栄一に、新組織である、社団法人「東京慈恵会」に加わってもらうことを頼み、そしてその草案を歌子の夫である穂積陳重に依頼したのである。この組織のもうひとつのポイントは、明治15年(1882)に創立した有志共立東京病院と、その後の東京慈恵医院の組織は皇族と明治政府の要人の婦人によって構成されていた。そこに時代の要請として大きく欠けていたのは徳川宗家であった。そこを埋めるようにして徳川家達に参入してもらうことであった。徳川16代当主の家達はすでに明治政府のなかで、貴族院議長を務めていた重要人物であった。

このようにして、明治40年(1907)7月19日、社団法人東京慈恵会が発足した。総裁は昭憲皇太后から有栖川宮威仁親王妃恵子殿下に、会長、徳川家達、副会長に渋沢栄一、顧問に井上馨、松方正義(四代、六代の内閣総理)、阪谷芳郎(大蔵大臣、東京市長)ら、評議員には伊藤梅子、大山捨松、渋沢かね子ら、医院長に高木兼寛、商業医員として石黒忠恵、岩佐純、松山棟庵ら、医員に金杉英五郎、野村虎長らであった。

このメンバーからわかることは、幕末から明治維新における全ての立場の人を取り込んだ最強の組織であった。図4のように皇室-徳川-新政府-華族-商業-民間を結びつけたものだった。この

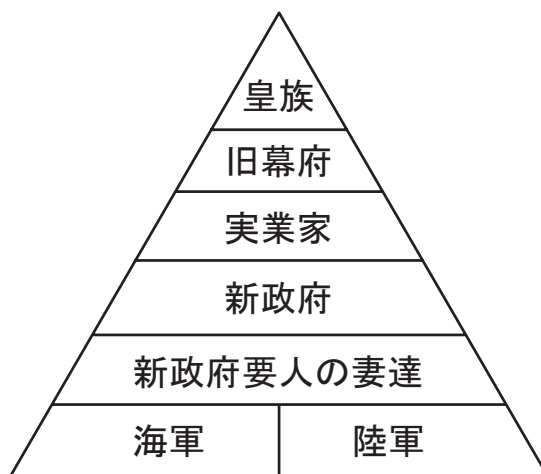


図4. 東京慈恵会が最強の組織である理由

なかで興味深いのはイギリス医学を否定した岩佐純、さらには高木との脚気論争で細菌説を唱えた陸軍・軍医総監であった石黒忠恵の名前までであることである。

穂積は明治初期のイギリス医学とドイツ医学の対立、実学と学理の対立による脚気論争などを知っていたのかどうか、また知っていたとしてもどのように理解していたかわからない。しかし穂積の視線で考えてみると、医療が差別なく平等に受けられること、慈悲の心を持って、暖かい眼差しのもとに役に立つ医療活動を行うこと、そしてその実現のためにあらゆる立場の人たちの協力を得ることなどを考えると、むしろ陸軍も海軍も関係ないと考えたのではないだろうか。高木にとってわだかまりが、この新組織によって一掃されたように思われる。

VI. 「慈恵・維新」の立役者と志士達

1. 維新の立て役者

慈恵にとっての活躍の詳細は先行論文²⁾³⁾で既に述べているので、その人となりと貴重な写真を紹介する。

1) 穂積陳重 (写真32)

穂積陳重は安政2年(1855)宇和島藩士・国学者である穂積重樹の次男として出生した。

三男、穂積八束(やつか)も法学者で陳重とともに一時、東京帝国大学教授として活躍し、特に

大日本帝国憲法の解釈普及に力を注いだ。穂積陳重は明治9年(1876)から明治14年(1881)までイギリス・ドイツに留学し、法律学を学んだ。明治19年(1886)より大正1年(1912)東京帝国大学教授、日本で最初の法学博士となった。日本の民法の祖といわれた。

2) 徳川家達 (写真33)

徳川家達は第16代の徳川宗家である。家達は明治10年(1877)から明治15年(1882)10月までイギリスのイートン・カレッジに留学していた。明治23年(1890)から貴族院議員を務め、明治36年(1903)から昭和8年(1933)まで貴族院議長を務めた。徳川内閣が成立に至るほど政治手腕を発揮した人物である。

現在も東京慈恵会の会長は徳川家によって代表され、第18代徳川家当主の徳川恒孝(つねなり)氏が勤めている。

3) 有栖川宮威仁親王妃慰子殿下 (写真34)

有栖川宮威仁親王も明治13年(1880)から16年(1883)までイギリス海軍に留学していた。威仁親王は大正天皇が誕生するまで皇太子の役割を果たしていた。

4) 渋沢栄一 (写真35)

渋沢栄一は慶応3年(1867)徳川昭武(あきたけ)に随行して西欧の近代的産業、経済制度を学んだ。第一国立銀行や多くの株式会社を設立したことは言うまでもない。前述のように渋沢栄一、妻かね子、長女、穂積歌子、次女、阪谷琴子、そのほか



慈恵・維新の立役者(その1)

穂積 陳重

- ◆ 穂積陳重は1855年(安政2)宇和島藩士・国学者穂積重樹の次男として出生
- ◆ 三男、穂積八束(やつか)も法学者で陳重とともに一時東京帝国大学教授として活躍し、特に大日本帝国憲法の解釈普及に力を注いだ。
- ◆ 穂積陳重は明治9年(1876)から明治14年(1881)までイギリス・ドイツに留学し、法律学を学んだ。
- ◆ 明治19年(1886)より大正1年(1912)東京帝国大学教授、日本で最初の法学博士となった。日本の民法の祖と言われた。

写真32. 穂積陳重



慈恵・維新の立役者(その2)

徳川 家達

- ◆ 第16代徳川宗家
 - ◆ 家達は明治10年(1877)から明治15年10月までイギリスのイートン・カレッジに留学していた。
 - ◆ 明治23年から貴族院議員を務め、明治36年から昭和8年まで貴族院議長を務めた。徳川内閣が成立に至るほど政治手腕を発揮した人物である。
- 国立国会図書館 近代日本の肖像 より転載
http://www.ndl.go.jp/portrait/datas/296_1.html
 [accessed 2012-06-01]

写真33. 徳川家達

多くの渋沢家一族が東京慈恵医会の設立、運営に多額の寄付をしている。また渋沢の手腕により、明治40年（1907）から大正2年（1913）の間に東京慈恵会の年平均収入が5倍以上に跳ね上がった。

このように有栖川宮家、穂積、高木、徳川はイギリスというキーワードで運命的につながっていた。高木が目指した、イギリス医学の基盤づくりにはあり余るほどの人脈であった。それを現実的に結びつけたのが、穂積陳重であり、渋沢栄一ということができる。

以上の立役者達は歴史が繰り出す渦によって、運命的に導かれ出会うことになった。その出来事は「大津事件」であった。その詳細は先行論文に記述したので、概略のみ紹介する。

「大津事件」とは、明治24年（1891）5月11日來日中のロシア皇太子ニコライ2世（写真12）を、警備巡査の津田三蔵が暗殺しようと傷害を加えた事件である。このときニコライ皇太子の接待役であったのが、有栖川宮威仁親王であった。高木兼寛は43歳、海軍医総監で、治療に携わるべく、侍医局池田謙齊らと京都に急行した。結局ロシア側は日本の好意は十分承知しているとし、大事にいたらなかった。高木は皇太子が帰国した5月22日まで京都に留まっていた。

この津田三蔵に対する判決を下した児島惟謙は、穂積陳重と同郷で旧知の仲であった。当時、大日本帝国憲法が施行直後の出来事でもあった。すなわちその憲法の真価を国際的に問われる出来

事であったのだ。児島惟謙はこの判定に際して、法学者、穂積陳重に意見を求めた。「外国でも敗戦国でない限り、自国の法律を曲げた例はない」「政府と対決して自分の主張が勝つ」と言って激励したといわれている。この判決によっては日本の司法権、近代国家としての評価を高め、不平等条約改正に大きく前進することになった。すなわち大津事件により「児島惟謙－穂積陳重」と「有栖川宮威仁親王－高木兼寛」が歴史的事実によって運命的な出会いして導いていったのである。

また穂積陳重の「老生は銅像にて仰がるより、萬人の渡る橋になりたし」の志には、高木の実学に基づく暖かく平等な医療、それはイギリス医学から学んだ想いと共鳴しあっているように思われる（故郷愛媛宇和島に穂積橋が現存する）。さらには 渋沢栄一の慈悲深い志とも相通じるものがある。なお明治21年（1888）に制定された我国最初の博士号に、穂積陳重、高木兼寛の名前があることから、彼らが当時の新しい学問の歴史を牽引していたことがわかる。

2. 慈恵・維新の志士達

「慈恵・維新」とは筆者の造語である。明治40年（1907）のこの大改革をそう呼んでもあまりある出来事であった。それではその維新の志士とはどんな人物だろう。筆者はその志士達にある共通のキーワードがあることを見出した。それは次の5つである

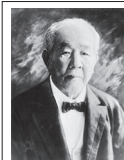


慈恵・維新の立役者(その3) 有栖川宮威仁親王妃慰子殿下

- ◆ 有栖川宮威仁親王も明治13年から16年まで尉子妃殿下を残してイギリス海軍に留学している。
- ◆ 威仁親王は大正天皇が誕生するまで皇太子の役割を果たしていた。
- ◆ 有栖川家、穂積、高木、徳川はイギリスというキーワードで運命的につながっていた。
- ◆ それを現実的に結びつけたのが、渋沢栄一である。



写真34. 有栖川宮威仁親王妃慰子殿下



慈恵・維新の立役者(その4) 渋沢 栄一

- ◆ 慶応3年徳川昭武（あきたけ）に随行して西欧の近代的産業、経済制度を学ぶ。
 - ◆ 第一国立銀行や多くの株式会社を設立
 - ◆ 渋沢栄一、妻かね子、長女、穂積歌子、次女、阪谷琴子、そのほか多くの渋沢家一族が東京慈恵医会の設立に多額の寄付をしている。
 - ◆ 渋沢の手腕により、明治40年から大正2年の間に年平均収入が5倍以上に跳ね上がっている。
- 国立国会図書館 近代日本の肖像 より転載
http://www.ndl.go.jp/portrait/datas/104_1.html
 [accessed 2012-06-01]

写真35. 渋沢栄一

1. ウィリアム・ウィリスの門下生
2. ウィリアム・アンダーソンの門下生
3. 成医会講習所
4. 海軍軍医総監
5. 薩摩出身

この条件を十分満足する人物、「慈恵・維新」の志士達を貴重な写真付きで紹介する。

1) 實吉安純 (写真36)

鹿児島出身、東京医学校の門下生である。あらゆる時期に高木兼寛の活動の主軸となった。海軍・軍医部（明治4年組）出身で、東京慈恵会医院・医学専門学校2代目校長を勤めた。さらに高木の後を継いで三代目、海軍・軍医総監となった。

2) 加賀美光賢 (写真37)

山梨出資であるが、鹿児島医学校でウィリスのもとで学んだ。また海軍・軍医部（明治5年組）で高木と同期である。また成医会の創立メンバーで四代目、海軍・軍医総監も勤めた。

3) 河村豊洲 (写真38)

薩摩藩医で、戊辰戦争の時、京都養源院でウィリスの助手を勤め、さらに鹿児島医学校でもイギリス医学を学んだ。その後、成医会の創立メンバーとして活躍し、五代目海軍軍医総監にもなった。

4) 豊住秀堅 (写真39)

薩摩出身で海軍・軍医部（明治4年組）である彼は高木の妻の妹、瀬脇好子と結婚し義弟となった人物である。また6代目、海軍・軍医総監でもあった。

そのほか、木村壮介、鈴木重道、山本景行（高木の義弟、海軍医療学舎）、鶴田鹿吉、石黒宇宙治、吉田貞準、戸塚環海、本田忠夫らが加わって最強の地盤を持つ高木連峰が完成した。これによって着実な慈恵の大きな発展と飛躍が期待されたのである。参考に歴代の海軍医総監を示す（表1）。そのほとんどが成医会講習所のメンバーであるこ



實吉安純

(はねよしやすずみ)

- ◆あらゆる時期に高木兼寛の活動の主軸となった
- ◆海軍軍医部（明治4年組）
- ◆東京慈恵会医院医学専門学校2代目校長
- ◆海軍軍医総監

写真36.高木・連峰の屋台骨
高木・連峰の志士(その1)

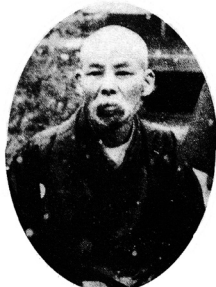


加賀美光賢

(かがみみつた)

- ◆鹿児島医学校
- ◆海軍軍医部（明治5年組）
- ◆成医会
- ◆海軍軍医総監

写真37. 高木・連峰の屋台骨
高木・連峰の志士（その2）



河村豊洲

(かわむらほうしゅう)

- ◆薩摩藩医養源院
- ◆鹿児島医学校
- ◆成医会
- ◆海軍軍医総監

写真38. 高木・連峰の屋台骨
高木・連峰の志士（その3）



豊住秀堅

(とよすみひでかた)

- ◆薩摩出身
- ◆海軍軍医部（明治4年組）
- ◆義弟
- ◆海軍軍医総監

写真39. 高木・連峰の屋台骨
高木・連峰の志士（その4）

とがわかる。また高木の義父である瀬脇寿人の力も大きい。長男の瀬脇寿雄はもちろんのこと、親戚となった豊住秀堅、山本景行、金杉英五郎らの強固なつながりは慈恵の屋台骨としてさらに頑強となっていた。

しかしその後まちうけていたのは大正12年(1923)9月1日午前11時58分、関東大震災(マグニチュード7.9)であった。震災によってみごとに慈恵は破壊された。そのなかで唯一残ったのは現在のカルテ保管庫として使用されている、当時としては珍しい鉄筋コンクリート建ての御大典記念館のみであった(写真40)。

その時、慈恵の初代学長は、金杉英五郎：大正10年－昭和16年(1920-1941))であった(写真41)。その震災の翌月の10月20日、荒涼たる廃墟の運動場で、学長、職員、学生すべてが集まり、非壮な始業式が行われた。

「宜しく天の試練に絶えしのび、校舎、設備悉(ことごと)く焼け失せたと雖(いえど)も、慈恵学園40余年の伝統と精華は聊(いささ)かなりとも、

揺るぎはせぬ。学長以下当事者は、今や鋭意復興に努めつつある」と述べて、全員の奮起を促すとともに、自らの決意を披露した。一同は涙とともに「東京慈恵会医科大学、万歳」と唱えて、復興の意気を一層高揚したといわれている。

金杉も高木の妻妹、瀬脇よね子の長女と結婚し、義理の甥にあたる。

VII. 結語：高木・連峰の先にあったもの

写真42にあるのは「地霊人傑」という文字である。この色紙は高木の母の実家、北家に残っていたものである。これは高木最後の色紙と言われている。その意味は、「郷の地に生きてきた人々の祖先の霊、その霊たちが、守り育ててきた風景や、そこに今生きる人々の人格をも含めて、つまりその地の文化とも呼べる、地霊が優れた人材・人格を生み出していく」と解釈されている。唐突であるが、「分け入っても、分け入っても青い山」という山頭火の有名は歌がある。これは行けども

表1. 歴代の海軍医総監
海軍軍医総監(少将相当)

氏名	任官日	主な補職	備考
戸塚 文海	明治9年12月18日	海軍省医務局長	
高木 兼寛	明治18年12月28日	海軍衛生部長	医学博士男爵
実吉 安純	明治25年8月6日	海軍省医務局長	医学博士子爵
加賀美光賢	明治26年5月26日	海軍軍医学校長	
河村 豊洲	明治30年12月28日	呉病院長	
豊住 秀堅	明治33年1月4日	海軍軍医学校長	
吉田 貞準	明治34年7月4日	呉病院長	
三田村忠国	明治34年9月15日	呉鎮守府医務部長	
戸塚 環海	明治35年5月27日	佐世保病院長	
山本 景行	明治37年9月1日	呉病院長	
鶴田 鹿吉	明治38年11月2日	呉病院長	
芳村 晋	明治38年11月2日	佐世保病院長	
石黒宇宙治	明治39年7月6日	舞鶴病院長	
太田弥太郎	明治41年8月28日	佐世保病院長	
斎藤 有記	明治43年12月1日	佐世保病院長	
桑原 荘吉	明治44年6月5日	呉病院長	



写真40. 関東大震災で残った御大典記念館

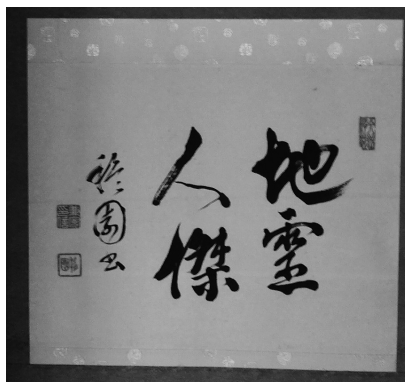


写真42. 高木兼寛 最後の色紙



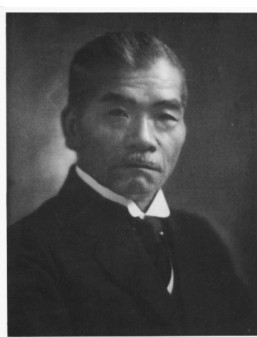
明治42年



大正2年



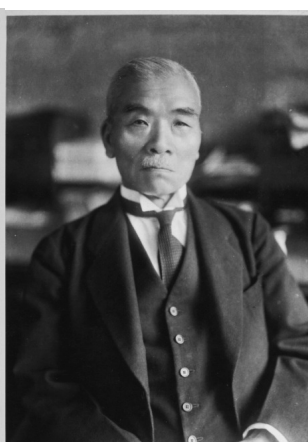
昭和3年



昭和5年



昭和7年



昭和15年



写真41. 初代学長、金杉英五郎

行けども手の届かぬ境地（青い山）に向かって、辿る（たどる）、山頭火の思いを綴る代表作である。

それではたくさんの偉業を成し遂げたはずの、高木によっての青い山とはなんだったのだろうか。それはまず、明治14年（1881）成医会結成時に偶然再来日したW. ウィリスを受け入れなかったこと、そして母、園が存命中に本籍を東京に移籍したことではないかと筆者は考えている。まず既に述べたが、ウィリスに対しては明治26年（1893）に鹿児島県の城山中腹に建てられたウィリスの弟子たちによるウィリスの頌徳碑に表れている。それは碑の裏の筆頭に高木兼寛の名前があることである。これはせめものウィリスに対する感謝の念を表したものと言える。

二つ目の課題は、生家の穆佐への思いである。高木は宮崎神宮の大改装するための幹事長として既に明治31年（1898）に就任している。そして、東京慈恵会創立と同じ年の明治40年（1907）に完成させた。このように高木は東京慈恵会の完成を目指す傍ら常に視線が故郷、宮崎、穆佐に向いていた。そして終生、母の名前である「園」と故郷「むかさ」の字をいれた雅号（がごう）、穆園（ぼくえん）という名前でも生きていたのである。

東京慈恵会医科大学の130年の歴史の源流にある高木兼寛の志は、公と私の振り子運動によって、激動の時代のなかを、確実に前進して行くことであった。筆者はそのエネルギーの源が、「地霊人傑」の言葉のなかに集約されているように考える。我々にとって地霊とは慈恵医大である。我々を育ててくれた慈恵医大を心より大切に、高木兼

寛の偉大な志を誇りとして持って受けついでいくこと、そのことを後進に伝えたいと思っている。

（本稿の要旨は、平成22年（2010）10月2日、第127回成医会総会で発表した。）

参 考 文 献

- 1) 東京慈恵会医科大学創立130年記念事業委員会. 東京慈恵会医科大学130年史. 東京：東京慈恵会医科大学；2011.
- 2) 中山和彦. イギリス医学の源流を、東京慈恵会成立過程から探る—不治の病「脚気」が導き出した不安の時代—. 慈恵医大誌 2009; 124: 305-14.
- 3) 中山和彦. ドイツ医学とイギリス医学の対立が生んだ森田療法. 慈恵医大誌 2007; 122: 279-94.
- 4) 佐藤八郎. 英医 ウィリアム・ウィリス略伝. 鹿児島：鹿児島教育委員互助会印刷；1968.
- 5) 森 重孝. 鹿児島の医学. 鹿児島：春苑堂出版；1993.
- 6) 鹿児島大学医学部. ウィリアム・ウィリス 没後100年追悼特集号. 鹿児島大学医学雑誌47（補冊1）：1995; 1-115.
- 7) 尾辻義人. 薩摩の医学史. 鹿児島日英協会会報2005; 8: 14-7.
- 8) 吉村 昭. 白い航跡（上下）. 東京：講談社；1991.
- 9) 松田 誠. 高木兼寛の医学—東京慈恵会医科大学の源流. 東京：東京慈恵会医科大学；2007.
- 10) 東京慈恵会医科大学創立八十五年記念事業委員会. 高木兼寛伝. 東京：東京慈恵会医科大学；1965.
- 11) 京都府医師会. 京都の医学史. 京都：思文閣；1980.
- 12) 京都府教育会. 京都府教育史. 京都：京都府教育会；1940.

